

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2007 年度～2009 年度  
 課題番号：19730429  
 研究課題名（和文）自己愛人格傾向のストレス対処過程における基礎的・臨床的検討—介入に向けて—  
 研究課題名（英文）A basic and clinical examination of the stress coping process in narcissism: toward intervention  
 研究代表者 小西 瑞穂 (KONISHI MIZUHO)  
 東海学院大学・人間関係学部・助教  
 研究者番号：90378448

研究成果の概要（和文）：本研究では、現代青年の間で特に注目されている人格特性の一つである自己愛人格傾向のストレス過程を検討した。その結果、自己愛人格傾向の高い者のストレス脆弱性や社会適応上の問題が生じる可能性が明らかになった。また、自己愛人格傾向の高い者はどのようなストレス状況にも積極的にストレスサーに關わって対処し、柔軟性に乏しいことが明らかとなった。さらに、自己愛人格傾向の高い者は様々な他者操作行動を用いて親しい友人に異なるイメージを与えており、対人関係の不安定性との関連が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study was to investigate the stress coping process of narcissistic personality. The findings indicated that the narcissistic personality was a vulnerable to stress. Highly narcissistic individuals actively cope with various stressors. The individuals also have poor flexibility. Then, they make various images on their close friends, using various manipulative strategies. This is supposed to be related to their unstable personal relationships.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,400,000	0	1,400,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	510,000	3,610,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：自己愛人格傾向、ストレス脆弱性、ストレス過程、コーピング、精神的健康

## 1. 研究開始当初の背景

現代青年の特徴として、自己愛的な(narcissism)傾向が強くなっていることが指摘されている(福島, 1992; 町沢, 1998)。青年期には児童期までに確立された自己から脱却し、同年代の仲間との間で新たな自己を再構築する必要性から、自己愛人格傾向が高ま

る時期(Kohut, 1971)である。また、自己愛人格傾向は誰にでも認められる心性であり、人が生きていくために必要なものである(Fromm, 1956)。しかし、その一方で自己愛性パーソナリティ障害といった臨床的な問題とも関連している人格特性とも言える。現在、社会問題となっている引きこもりや

NEET (Not in Employment, Education or Training) といった青年期の心性との関連も示唆される人格特性ではあるが、この自己愛人格傾向の高い者のストレス耐性やストレス処理過程を検討した研究はほとんど見当たらない。

## 2. 研究の目的

自己愛人格傾向について、そのストレス過程に焦点をあて、以下の4点について検討をする。

- (1) 自己愛人格傾向の特徴
- (2) 自己愛人格傾向のストレス脆弱性
- (3) 自己愛人格傾向の高い者が用いやすいストレス・コーピング
- (4) 自己愛人格傾向の高い者の対人行動

## 3. 研究の方法

すべて質問紙調査による研究を行った。調査協力者に対しては口頭および書面にて、研究の目的と内容、本人の意志により調査協力の撤回が随時可能であること、得られたデータは研究目的以外の目的で使用しないことを説明し、署名にて同意を得た。また、データは個人が特定できないよう保管・統計処理を行い、研究結果については後日公開することを伝えた。なお、本研究は滋賀医科大学倫理委員会の承認を得て実施された。

### (1) 自己愛人格傾向の特徴の検討

①自己愛人格傾向の人格特性をより明確にするために、大学生266名(男性105名、女性161名、平均年齢21.44歳( $SD=2.97$ 歳))を調査対象とし、Narcissistic Personality Inventory・35(以下NPI-35;小西・大川・橋本,2006)および新版東大式エゴグラム(以下TEG;吉内・山中・佐々木・野村・久保木・末松,2000)、自己評価式抑うつ性尺度(Self-Rating Depression Scale;以下SDS;Zung,1965)、日本版主観的幸福感尺度(Subjective Happiness Scale;以下SHS;島井・大竹・宇津木・池見,2004)の尺度を用いて検討した。

②自己愛人格傾向の中心を成す自己肯定感について検討するために、大学生127名(男性55名、平均年齢21.96歳( $SD=1.58$ 歳)、女性72名、平均年齢21.35歳( $SD=0.95$ 歳))を対象に調査を行った。NPI-35および自己認知に関する尺度(外山・桜井,2000)、ストレス反応尺度:尾関他(1994)、幸福感尺度(植田・吉森・有倉,1992)を用いた。

### (2) 自己愛人格傾向の高い者のストレス脆

## 弱性の検討

大学生174名(男性72名(平均年齢20.96歳, $SD=1.46$ 歳)、女性102名(平均年齢20.91歳, $SD=2.58$ 歳))を対象に調査を2回実施した。NPI35および幸福感尺度(植田・吉森・有倉,1992)、ストレス反応尺度(尾関・原口・津田,1994)、ストレスサー尺度(尾関他,1994)を用いた。

### (3) 自己愛人格傾向の高い者のコーピング・パターン

①大学生231名(男性82名(平均年齢22.00歳, $SD=1.71$ 歳)、女性149名(平均年齢21.10歳( $SD=0.79$ 歳))を対象に調査を実施した。NPI-35および対人コーピング尺度(加藤,2000)、ストレス反応尺度(尾関他,1994)、幸福感尺度(植田他,1992)、認知的評価尺度(岡安,1992)、コーピング尺度(岡安,1992)を用いて、対人ストレス状況および身体脅威状況、社会的評価状況の各ストレス状況を設定し、検討した。

②自己愛人格傾向とコーピング・パターンの1つであるタイプA行動パターンとの関連を調べるために、大学生113名(男性75名、女性38名、平均年齢は18.75歳( $SD=0.81$ 歳))を対象に、NPI-35および日本のタイプA行動評価尺度(瀬戸・長谷川・坂野・上里,1997)、自尊感情尺度(山本・松井・山成,1982)、自己評価式抑うつ性尺度(Zung,1965)から構成される調査を行った。

### (4) 自己愛人格傾向の対人行動の検討

大学生122名(男性37名・女性85名、平均年齢は19.30歳( $SD=1.38$ 歳))を対象とし、NPI-35および他者操作行動尺度(寺島・小玉,2003)への最も親しい友人(男性39名・女性83名、平均年齢19.45歳( $SD=1.54$ 歳))にも調査協力を依頼し、友人評価尺度(林,1978)への回答を求めた。

## 4. 研究成果

### (1) 自己愛人格傾向の特徴

自己愛人格傾向の高い者は厳格で、現実的・効率的に物事を処理し、自由奔放で協調性に乏しい一方で、世話好きな面があることを見出した。また、自己愛人格傾向の高い者は低い者に比べて抑うつ度が低く、主観的幸福感が高い状態にあることが示唆された(滋賀医科大学雑誌,2008掲載)。次に、適応的な人に認められるという自己に対する肯定的認知バイアスであるポジティブ・イリュージョンと自己愛人格傾向との関連を検討した結果、自己愛人格傾向の中心を成す自己に対する強い肯定的感覚とは非現実的にポジティブに捉えられたものであることが示唆された(同志社心理,2007掲載)。

## (2) 自己愛人格傾向のストレス脆弱性

素因—ストレスモデルを用いて、自己愛人格傾向がストレスに脆弱な素因であるかについて、大学生を対象に検討した(パーソナリティ研究, 2008)。その結果、自己愛人格傾向の高い者がストレスを多く経験すると、男性では抑うつ反応および自律神経系活動性亢進反応、女性では身体的疲労感が増加し、一方ストレスの少ない状況ではこれらのストレス反応が自己愛人格傾向の低い者や平均的な者に比べて最も少なかった。つまり自己愛人格傾向は個人の精神的健康を部分的に支えるが、それはストレスの少ない状況に限定され、ストレスの多い状況ではストレス反応を生じやすい、ストレスに脆弱な素因と考えられる。

以上より、自己愛人格傾向はストレスが少なく際には精神的健康を高める要因となるが、ストレスに脆弱な素因と考えられ、社会問題化している引きこもりや NEET の思春期・青年期心性とも深く関連している可能性がある。

## (3) 自己愛人格傾向の高い者が用いやすいコーピング・パターンについて

自己愛人格傾向の高い者のコーピング・パターンに焦点をあて、対人ストレス状況、身体脅威状況、社会評価状況という3つのストレス状況を想定し、各ストレス状況における自己愛人格傾向の高い者のストレス過程を検討した (International Congress of Psychology, 2008; 日本健康心理学会, 2008, 2009 発表)。全般的にすべてのストレス状況において自己愛人格傾向の高い者は、ストレスに積極的に関わっていくことが認められた。しかし、男性の場合積極的対処を行っても、社会的評価状況では精神的健康への影響は認められず、身体的脅威状況では抑うつを高める可能性も示唆され、自己愛人格傾向の高い男性にとってこれらのストレス状況が対人ストレス状況よりもよりストレスフルであることが予測された。女性の場合には対人ストレス状況ではコーピングの媒介過程が認められず、社会的評価状況および身体的脅威状況では異なるストレスにも関わらず、同様のストレス過程が認められた。従って、自己愛人格傾向の高い女性のストレス過程は状況によって変化しない可能性が示唆され、コーピングの柔軟性という点で男性に比べて乏しい面があるのかもしれない。つまり、本研究からはコーピングの行い方やストレス過程が自己愛人格傾向という人格特性によって影響を受けていることが明らかになった。

また、コーピング・パターンの一つであるタイプ A 行動パターンと自己愛人格傾向との関連を検討した結果、自己愛人格傾向がタ

イプ A 行動パターンの敵意行動を媒介すると抑うつ、完璧主義的傾向を媒介すると自尊感情を促進することが明らかになった(日本健康心理学会, 2007 発表)。

## (4) 自己愛人格傾向と対人行動

次に、他者評価に敏感な自己愛人格傾向の高い者にとってストレスフルな対人関係に焦点をあて、検討を行った。自己愛人格傾向の高い者が親しい友人に対して行う他者操作行動によって、その友人が抱く本人へのイメージにどのように影響を与えるかを検討した。その結果、自己愛人格傾向の高い者は様々な他者操作行動を行うことが明らかとなり、その操作行動の種類によって他者に与えるイメージが異なることがわかった。つまり、他者から注目や賞賛を集めるために優越性操作を用いた場合には他者から調和的でない人というイメージを受けるが、自分の劣位性をアピールする卑下性操作を行った場合には他者から調和的であるというイメージを得ていることがわかった。つまり、自己愛人格傾向の高い者は様々な操作行動を行うために、他者から様々な印象を得る可能性があることを示している。これは自己愛人格傾向の高い者の対人関係の不安定性を示唆するだけでなく、社会適応上の問題やストレス脆弱性との関連が推測されるものと考えられる。

以上より、本研究では自己愛人格傾向のストレス過程を中心に、4つの観点から検討を行った。その結果、強い自己肯定感を特徴とする自己愛人格傾向は多くのストレスにさらされると脆弱な素因となり得るが、ストレスの少ない状況では個人の精神的健康を支える役割を担っている。つまり、本研究で明らかとなった、自己愛人格傾向のコーピングの柔軟性の乏しさが脆弱性に関連していると仮定するならば、コーピングの幅を増やす認知行動療法的介入などが有効であるかもしれない。認知の歪みを是正し、自己認知やストレスへの認知を修正することで、自己愛人格傾向の高い者のストレス耐性を高め、より精神的に健康に生きていくことを可能にするかもしれない。

一方で、自己愛人格傾向の低い者の精神的健康度がストレス量によって変化しないことも本研究からは明らかとなっており、自己愛人格傾向の低い者に自分の感情面や身体感覚に乏しい面がある可能性が示唆される。この自己愛人格傾向の低い者に関する研究の蓄積は非常に乏しいため、言及するには限界が多いが、自己愛人格傾向の低い者に対してはバイオフィードバックや自律訓練法といった心理療法が有効となるかもしれない。これらの技法を用いて、自分の身体に関する適切な認知の回復や身体知覚に関する

る正確さを高めることで、早期にストレスフルな状況を認知し、対処を行える力を向上させることが、自己愛人格傾向の低い者の精神的健康の向上に役立つ可能性があるかもしれない。

自己愛人格傾向とそのストレス過程や精神的健康を論じた研究は国内外において非常に少ないことを考えると、本研究の成果は今後の自己愛人格傾向の理解や介入に一定の示唆を与えることができるかもしれない。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- ① Yumi Iwamitsu, Ozeki Yuji, Mizuho Konishi, Junichi Murakami, Shin Kimura, and Masako Okawa 2007 Psychological characteristics and the efficacy of hospitalization treatment on DSPS patients with school refusal. *Sleep and Biological Rhythms*, 査読有 vol.5, p.15-22.
- ② 小西瑞穂・山田尚登・佐藤 豪 2008 自己愛人格傾向とポジティブ・イリュージョンとの関連 *同志社心理*, 査読無 54, 7-18.
- ③ 小西瑞穂・山田尚登・佐藤 豪 2008 大学生の自己愛人格傾向と自我状態との関連 *滋賀医科大学雑誌*, 査読有 21, 4-8.
- ④ 小西瑞穂・山田尚登・佐藤 豪 2008 自己愛人格傾向についての素因—ストレスモデルによる検討 *パーソナリティ研究*, 査読有 17,29-38.
- ⑤ Yumi Iwamitsu, Orika Mikan, Mizuho Konishi, Tatesuke Aoki, Masako Okawa, and Naoto Yamada 2009 Schizophrenic patients have a preference for symmetrical rectangles: A comparison with preferences of university students. *International Journal of Psychiatry in Clinical Practice*, 査読有 vol.13, p.147-152.
- ⑥ 小西瑞穂 2009 自己愛人格傾向のパーソナリティ構造とそのストレス過程の検討 *同志社大学文学研究科博士論文*
- ⑦ 小西瑞穂 2009 自己愛人格傾向と両親の養育態度との関連 *東海学院大学紀要*, 査読無 3, 125-127.
- ⑧ 小西瑞穂・佐藤 豪 2009 自己愛人格傾向と養育態度との関連が精神的健康に及ぼす影響について *同志社心理*, 査読無 56, 45-52.
- ⑨ 小西瑞穂・秋定有紗・稲垣貴彦・安藤光子・上山崎悦代・大川匡子・山田尚登 2010 統合失調症患者の家族心理教育の立ち上げと継続 *滋賀医科大学雑誌*, 査読有 23, 31-35.
- ⑩ 小西瑞穂 2010 慢性期統合失調症患者

への個人Social Skills Trainingの試み *東海心理臨床研究*, 査読無 5,45-53.

⑪ 香月富士日・小西瑞穂・伊藤順一郎・福井里江・贄川信幸・二宮史織・森山亜希子・大島巖 印刷中 実践報告:ある病院の家族心理教育導入初期の2年間の関わり～心理教育普及ガイドラインおよびツールキットを用いてのコンサルテーション～ *家族療法研究*, 査読有

[学会発表] (計 16 件)

- ① 小西瑞穂・山田尚登・佐藤 豪 自己愛人格傾向とタイプA行動パターンとの関連が精神的健康に及ぼす影響について *日本健康心理学会第20回記念大会* 2007年8月31日 東京
- ② Konishi, M., Yamada, N., and Sato, S. The relationship between ego, narcissism and mental health. *Health Psychology in Asia*. 2, Sep 2007, Tokyo
- ③ 内田淳子・小西瑞穂・宮崎総一郎・大川匡子 Wisconsin Card Sorting Test (WCST)を用いた睡眠時無呼吸症候群患者における治療前後の前頭葉機能調査 *日本睡眠学会第32回定期学術集会* 2007年11月8日 東京
- ④ 大槻秀樹・佐々木禎治・小西瑞穂・五月女隆男・松村一弘・藤野和典・浜本 徹・古川智之・辻田靖之・江口 豊 脳低温療法が著効した心室細動による心停止症例に対する神経心理学的検討 第21回日本脳死・脳蘇生学会総会・学術集会 2008年5月11日 大阪
- ⑤ Konishi, M., Yamada, N., and Sato, S. An examination on coping in interpersonal stress of narcissistic personality. *XXIX International Congress of Psychology*. 22, Jul, 2008, Berlin.
- ⑥ 小西瑞穂・山田尚登・佐藤 豪 身体脅威状況における自己愛人格傾向のストレス過程 *日本健康心理学会第21回大会* 2008年9月13日 東京
- ⑦ 小西瑞穂・山田尚登 統合失調症患者への個人Social Skills Trainingの試み SST普及協会第13回学術集会 2008年12月12日 前橋
- ⑧ 小西瑞穂・安藤光子・稲垣貴彦・上山崎悦代・秋定有紗・目片真由美・橋本明子・疋田詩織・多根さおり・山田尚登 初めての家族心理教育—トライアンドエラーを重ねて— *心理教育・家族教室ネットワーク第11回研究集会*. 2008年3月13日 千葉
- ⑨ 秋定有紗・小西瑞穂・山田尚登・佐藤 豪アレキシサイミア傾向者における表情認知能力の検討 第104回近畿精神神経学会

- 2009年2月14日 大阪
- ⑩ 小西瑞穂・山田尚登 不登校生徒を持つ親の会の立ち上げと取り組みー学校との協働ー心理教育・家族教室ネットワーク第12回研究集会 2009年3月6日 東京
  - ⑪ Konishi,M. The effect of SST for students with trait of pervasive developmental disorders and psychoeducation for their parents. Association for Behavioral and Cognitive Therapies 43rd Annual Convention. , 20,Nov 2009, NewYork.
  - ⑫ 稲垣貴彦・小西瑞穂・山田尚登 抗うつ薬の処方により問題行動が著明に改善した、反抗挑戦性障害の一例 日本思春期青年期精神医学会第22回大会 2009年9月5日 東京
  - ⑬ 小西瑞穂・佐藤 豪 社会評価状況における自己愛人格傾向のストレス過程 日本健康心理学会第22回大会 2009年9月7日 東京
  - ⑭ 稲垣貴彦・小西瑞穂・山田尚登 うつ病の診断と治療により問題行動の著明な改善を得た反抗挑戦性障害の一例 第29回日本精神科診断学会 2009年10月16日 東京
  - ⑮ 小西瑞穂 うつ病とSASとの比較・HAM-D構造化面接SIGH-Dを用いて・第6回アジア睡眠学会日本睡眠学会第34回定期学術集会第16回日本時間生物学会学術大会合同大会 シンポジウム 2009年10月25日 大阪
  - ⑯ 稲垣貴彦・小西瑞穂・山田尚登 見落とされていたうつ病の治療により問題行動の著明な改善を得た反抗挑戦性障害の一例 第29回日本社会精神医学会 2010年2月25日 島根

[図書] (計1件)

- ① 定松美幸・小西瑞穂訳 あなたにもできる脳活性化ー会話療法でアンチエイジングー。 ”生き生きとした心”の有利な点 69-76. フレグランスジャーナル 2007.

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

講演

- ① 小西瑞穂 2007 思春期のころ 光泉中学・高等学校保護者会
- ② 小西瑞穂 2007 外来SST 滋賀SST研究会
- ③ 小西瑞穂 2008 中高生の悩み〜スクールカウンセリングを通して〜 滋賀

県うつ・不安障害研究会

- ④ 小西瑞穂 2008 思春期の子どもの悩みとその対応 滋賀医科大学公開講座
- ⑤ 小西瑞穂 2008 対応のこつと心理教育 光泉中学・高等学校職員研修会
- ⑥ 小西瑞穂 2009 発達障害の概要とその対応 光泉中学・高等学校職員研修会

研修会

- ①小西瑞穂 2009 標準版家族心理教育研修会

6. 研究組織

(1)研究代表者

小西 瑞穂 (KONISHI MIZUHO )

研究者番号：90378448